兄と弟の3日間

氷綴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
兄と弟の３日間

【Ｎコード】
Ｎ１６９７Ｆ

【作者名】
氷綴

【あらすじ】
ふとしたことで記憶を失った弟。記憶を失った弟といつも通りに生活する兄。そして…３日後に待ち受ける驚愕の真実とは…。

序章：消えたキオク（前書き）

まだまだ青二才なのでわからないことがいっぱいです。
皆様に最後まで
読んで頂けるような小説を書きたいと
思っていますので
どうか、よろしくお願いいたします。

序章：消えたキオク

・・・ん？
ここはどこだろう。
なにも覚えていない。
ふと目が覚めると見知らぬ白い天井が見えた。

俺は混乱している中、
隣で椅子に座っている青年に気がついた。
その青年は俺に話しかけてきた。

「うおい！やっと起きたなてめー！」

・・・てめー？
初対面のはずなのにえらい口のきき方だ。
俺は”ムッ”っとしながらもその感情を抑えて尋ねてみた。

「ここはどこだ？」

「はぁ？事故で頭でも打っておかしくなったのか？
どう見てもお前の部屋だろ。」

「・・・え？」

事故？
ここが俺の家？
試しに手足に力を入れてみた。
あまりにも正常に動いたので安心しながらも少しガッカリした。
なんて考えてる場合ではない。

俺は事故に遭った記憶なんかない。
混乱しているのを悟られないように青年に聞いてみた。

「俺はいつ事故にあったんだ？」

青年は飽きれた顔しながらだるそうに説明してくれた。

「3日前に自分で作った落とし穴に落ちたんだろ。
そんなことも忘れたのか？ホントバカな弟だぜ。」

おっ、おとしあなっ？
落とし穴ってあの落とし穴だよね？
自分で作って自分で落ちた？

しかしそれ以上に驚いた言葉を彼は発していた。
・・・俺が弟？
ということはこの青年は俺の兄貴？

そういえば落とし穴のことはおろか自分の名前すら思い出せない。
先ほど自分で発したはずの声も聞き覚えのないものだった。
そして・・・部屋にあった鏡を兄と称される人物に気づかれないように恐る恐る覗いてみる。
そこには見たこともない顔が映し出されていた。
また考えが混乱してきた。
とりあえず興奮する気持ちを抑えて兄と称される人物に話しかけてみる。

「すまない。何も思い出せないんだ。
落とし穴に落ちたことも、あんたのことも。そして・・・自分のことも。」

兄と称される人物は目をぱちくりさせて俺のことをじっと見ている。
なにかついてるのだろうか？
変な不安を覚えていると兄と称される人物は怒った口調で話しかけてくる。

「え？どういうことだ？思い出せないってなんだよ。
変な心配させといて今度はふざけてるのか？いい加減にしろよ？」

本当のことを言って怒られるとは・・・。
俺は泣きたくなったが今はソレどころではない。

「いや、本当になにも思い出せないんだ。信じてくれ。」

「じゃあ試しに聞くが・・・お前の名前はなんだ？」

俺は戸惑った。自分の名前すら思い出せない。
どうしたらよいのだろう・・・。

考えていると壁になにやら風景画が貼ってあることに気がついた。
見たところなにかの賞をもらっているようだ。
その片隅に名前が書いてある。
”麻白　隼兵”と書いてあった。
おそらく”ましろ　じゅんぺい”と読むのだろう。
俺はわが意を得たりと自信満々に答えた。

「ましろ　じゅんぺいだ。」

変な沈黙が流れた。
俺は不安になった。なにかまずいことでも言っただろうか？

「てめー！やっぱりふざけてんだろ！そりゃあ兄貴の名前だろっが！
それにまじろだまじろ！」

そうか。まじろと読むのか。俺は勝手に納得して満足した。
しかしすぐに我に返った。
すると俺の名前はなんなんだろう。

「今のはジョークだ。で、俺の名前はなんなんだ？」

こんなときにジョークを言ってられる余裕は俺にはない。
しかし必死に弁解した。

「お前は拓真だろ！麻白　拓真！」

俺は反応に困ってしまった。
自分の名前にピンとこなかった。
さすがに焦った。
こんな状態を記憶喪失というのだろうか。
いまいち実感がわかないがそう解釈した。
そして口に出し兄に説明をする。

「どうやら頭を打って記憶喪失とやらになったっぽいんだ。
本当に何も思い出せないし。」

やはり兄は驚いていた。・・・ように見えた。

「は？まじけ？お前運いいなー！」

・・・これが俺の兄か。

どこまで気楽なのだろうか。まぁ、めんどうなことにならなくてよかった。
すると兄は続けて言った。
「俺は今から学校行って来るから今日はとりあえず家でやすんでろ。」
そういうと兄は部屋を出て行ってしまった。
ちょ・・・、置いてきぼりかよ！
まぁこれで一人で色々考えられるからいいか。
そう解釈すると布団から出てけ伸びをした。

2章：失った自分

一人家に取り残された俺はとりあえずシャワーを浴びることにした。
・・・着替えはどこにあるのだろう？
やっとの思いでたどり着いた洗面所を探してみたが見当たらなかった。

自分の部屋に戻り引き出しを漁ってみた。
・・・俺は一体何歳なのだろう。
引き出しに入っていた”あるもの”を手にして疑問になった。
今はそんな気分じゃない。シャワーを浴びたいんだ。
そう言い聞かせてその”あるもの”を引き出しに戻し着替えを探した。
３つ目の引き出しでようやく”当たり”にたどり着けた。
記憶を無くすと色々大変だな。直感でそう思った。

シャワーを浴びた俺はリビングにあったソファーに座り色々と考え込んだ。
今思うとシャワーの浴び方などの常識は覚えていることに喜びを感じられた。
完全に記憶を無くしていたらどうなっていたのだろう。
想像もする気分にならなかった。
いや、言い直せば想像ができなかった、の間違いだろう。
記憶がなくなった、という事がいまだに理解できない。
元の俺はどんな人間なんだろう。どこで何をしていた人間なのだろう。
ここにいる俺は何者だろう。考え出すとキリがなかった。
そう思っていると何か別のことをしたくなった。
とは言っても・・・

なにをしようにもすることがない。

・・・そうだ。

見失った自分を取り戻そう。

そう納得すると悟りを開くために外出したくなった。

何も知らない町を散歩するのもいいかもしれない。

俺は俺の知らない俺の町を探検することにした。

3章：俺の町

・・・。
ここは本当に俺の町なのだろうか。
正直言ってそう思っている。
残念ながら右も左もわからない。
家に帰れるかどうかも心配になってきた。
帰巣本能が働けばいいな、うん。
そんなことを考えながら俺は町を歩いていた。

数分後、無意識に歩いていると公園にたどり着いた。
そのまま流れに沿ってブランコにまたがった。
・・・俺はこのまま記憶が戻らないまま生きていかなくてはならないのだろうか。
唐突に起きた記憶喪失。
本当に実感がわかない。
俺はこれからどのように生きていけばいいのだろうか。
色々な考えが脳裏を駆け巡った。
しかしある考えだけはどれだけ考えても不安だった。
それは・・・俺は記憶喪失前の自分のことを覚えていない。
それだけが不安で仕方がなかった。
人間関係が何もわからないのはとても不安だった。
現に今こうして外にいることすらも恐怖に感じられた。
何も知らない町で何も知らない自分がいる。
そう思うとすべてが恐怖に思えた。
しかしそれでも俺は外に出た。
それほど以前の自分を取り戻したかったからだ。
が、・・・何も思い出せない。
これでは外に出た意味がない。

なにか手がかりを見つけないと・・・。
見つけないと・・・？
見つからないことは玄関を開けた瞬間からわかっていた。
玄関を開けた瞬間そこには知らない風景が広がっていた。
知らない町でなにを見つけろというんだ。
とんだ無茶振りだ。
いや、自分で決めたことだし仕方ないか、うん。
見つからないなら早く帰ろう。
正直、精神的に疲れた。
ぐっすり寝たい気分でいっぱいだ。
そう考えがまとまるとブランコから飛び降りた。

・・・。
家・・・どっちだっけ・・・？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1697f/

兄と弟の3日間

2010年10月11日00時47分発行